

室町綾小路下ル町

松本町 井筒屋定好

右同町

洲濱屋仁兵衛

〔翁草 五十七〕武者小路殿歟鳥丸殿歟忘れたり、御門弟の某新製の菓子、けぬが上と云るを捧げれば賞し給て、其家の雜掌なる人の、取敢ずよめる由して下し給ふ、

心ざしあつき氷のけぬが上に積りて深き雪もめづらし、假初の戯も優艶也けり、其菓子は氷砂糖に衣を掛し製也、銘も誰が名付しやらんいとおかしげに聞ゆ、

〔江戸總鹿子 六〕ち。ら。と。ふ。

花町 かまくらや

〔柳亭記 下〕ち、ら糖

鱗形 延寶六年刻、江戸住雪撰に曰、俳諧といつば、世話をもと、して新しき句合を尋て、一句をはなぐと

仕立るより外の習なしといへり、扱はござんなり、それ程の事なれば、おさく人におとるまじ

ものをと高くおもひて、彼者とつれだち、さる席に出るに江戸橋の風痰を吹き、といふ前句の

吟聲を聞、不斗思ひよりしかば、是は此度長崎を下るちらとうと付侍れる、尤名所をならべ、あ

きのふ所よりもよく侍れど、ちらたらう此ほど仕出しあたらし過候ともどされたりとあれば、

ちら糖は痰切といふ物の類歟、國町の沙汰 延寶二年寫本に、日本橋第一番商、砂やがちりめん饅頭、糍

町の助三ふのやき、兩國橋のちらとう、芝のさんぐわんあめ云々、注ニちらとうは風味甚甘

美なり、風邪を去り氣を散じ、諸病に宜しとて、今專賞翫とあれば、延寶中よりおこなわれし菓子

なれど、今は絶たる歟、

〔和漢三才圖會 百五〕まつのみどり松翠 附衣櫃 達摩隱

按松翠、溲麪作之、狀頗如地黄、而糝砂糖爲衣、微焙、形似松翠、故名之、

一種 用櫃去穀、以沙糖爲衣者、名衣櫃、又用乳柑、去瓢、切片、以沙糖爲衣者、名達摩隱、由九年面壁之